

伝え合い、学び合う授業をめざして

国語 第3学年

金沢市立野田中学校・教諭

1 事例の概要

本校の生徒は、自分の考えや読み取ったことを文章で表現する活動や、発表を取り入れた活動には意欲的に取り組んでいる。しかしながら、他の意見を取り入れて、より高めたり深めたりする面が弱く、授業においても学び合える場面があまり見られないのが現状である。学習内容をより深めるには、生徒相互の意見の交流を意識した学習場面の設定が必要であると考え、国語科では、昨年度から、「自分の思いや考えを伝え合い、互いに学び合える」授業づくりに取り組んでいる。また、伝え合う方法としては、特に言葉による伝え合いを重点目標とした。

2 実践にあたって

「伝え合う」学習では、伝えるべきことがらが明確であることが必要である。何を伝えたいのかを明らかにすることで、聞き手にも伝わり、意見の交流が活発になる。したがって、「話すこと」「聞くこと」だけに焦点をあてるのではなく、「読むこと」「書くこと」との領域間の関連を図り、文章の構成や展開を正確にとらえる学習活動や、優れた表現に触れさせ、それを自分の表現に生かす学習活動を通して論理的にものごとを考えたり、書いたりする力を育てていきたいと考えた。

また、伝え合いによる学習の深まりをめざすには、生徒個々が互いに関わり合っていく場面を意識的に設定し、学び合うことによる深まりを実感させることが大切である。グループ学習など、学習形態の工夫を図るとともに、学年が上がるにつれてより深まりが見られるよう、各学年に応じた目標が必要であると考えた。1年時では「声の大きさ、話す速度」を意識した話し方や聞くときのポイント、姿勢など基本的なことの確認が中心であったが、2年時では「型」を用意し、パターン化した意見の交流、3年時では2年時の学習を生かした「自分の言葉」による意見の交流を行うことで、学習の深まりをめざすこととした。

以上のことを踏まえ、昨年度から次の2点について重点的に取り組んでいる。

- ① 「伝えたいことがら」が明確になるように、授業の工夫を図る。
 - ・ 論理的にものを考える力を育てる。
 - ・ 根拠を明らかにして書く。
- ② 「伝え合い」を意識した授業の工夫を図る。
 - ・ 話し手が一方的に伝えるのではなく、聞き手が必ず質問や感想を述べ、それに対して話し手が再度応えるという、一往復半以上のやりとりをする。

B-1 指導計画と指導の工夫

3 実践内容（2年時の取り組み）

(1) 単元の目標

聞き手を意識した効果的なプレゼンテーションを行うとともに、聞き手と話し手の意見の交流による学習の深まりを実感させる。

(2) 指導上の工夫点

- ・ 補助教材に工夫し、生徒が見通しを持って活動に取り組めるようにした。

- ・生徒一人ひとりがキャッチコピーづくりに関わるができるように役割分担を行い、やるべきことがらを明確にした。
- ・生徒一人ひとりがプレゼンテーションに関わるができるように、質問や意見発表の文例を渡し、事前学習を行った。
- ・プレゼンテーションでは、実際に図書ボランティアの方に参加していただくことで、意欲を持たせるようにした。

4 指導の実際

学習活動	教師の支援と評価
1. 前時を振り返る。 2. 学習課題と手順を確認する。 ゲストを紹介する。	<ul style="list-style-type: none"> ・プレゼンテーションの目的について確認する。 ・全員が発表することを伝える。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px auto; width: 80%;"> 学習課題 キャッチコピーを効果的にプレゼンしよう。 質問・意見・感想で考えを深め合おう。 </div>	
3. プレゼンテーション	<ul style="list-style-type: none"> ・評価観点を確認する。

C-1 指導案	C-2 ワークシート	C-3 ワークシート
C-4 ワークシート	C-5 ワークシート	C-6 ワークシート
C-7 ワークシート	C-8 ワークシート	

5 成果と課題

(1) 成果

2年から3年へと「伝え合う場」を意識した授業づくりに取り組んできた結果、以下の点で成果がみられた。

- ・「話し合うこと」への抵抗も少なくなり、特にグループ活動では、自分の意見や考えを積極的に伝えようとする生徒が増えてきた。(国語の授業だけでなく、他教科の学習活動の中でも、話し合う姿が見られるようになってきている。)
- ・一往復半以上のやりとりをすることで、「聞く」力が育ってきている。発表を聞いたあと必ず発言を求められるということから、特に指示しなくてもメモを取りながら聞くようになってきた。
- ・意見や考えを伝え合うことで、学習内容が深まることを実感できるようになってきた。
- ・自分以外の意見や考えに多く触れることにより、多面的にものごとを見ることができるようになってきている。

(2) 課題

まだまだ「伝え合い」がさらに深い「読み」につながっているとは言えないのが現状である。「伝えたいことがら」が明確でなかったり、伝えるための語彙力が十分に身に付いていなかったために、形だけの話し合いで終わったというグループもいくつかある。「読むこと」「書くこと」領域や「言語事項」との関連をさらに図っていく必要がある。

また、学び合う場面をどう評価していくかということも大きな課題である。「どの場面」で「何」を評価するのかを指導者は明確にし、生徒の学習の深まりをしっかりと把握したい。

意見のぶつかりあいの中から自分とは違う考えを知り、そのことが視野を広め、より質の高い「伝え合い学習」につながっていく。一往復半という形はできつつあるので、今後はその内容を充実させるための手だてを考えていきたい。

わかる授業の実現をめざした支援の工夫

社会 第1学年

志賀町立富来中学校・教諭

1 事例の概要

本校では、2年前から生徒の「確かな学力の育成」をテーマに学校研究の実践に取り組んでいる。研究当初は「確かな学力の育成」に関わる自校の課題は何であるのかについて、繰り返し議論してきた。その議論の過程で導きだされた研究の重点が、「わかる授業の実現」であった。

「わかる授業の実現」に不可欠なものは、生徒の学習意欲である。教師は、生徒の学習意欲を喚起し、「わかった!」「できた!」と実感できるような学びを実践しなければならない。

そこで本校では、授業改善に関わる課題を教師間で分析し、「わかる授業の実現」に向けて、「授業スタイルの定着」「学習指導に生かす評価の工夫」「学習意欲を引き出す教材の工夫」を研究の視点として位置づけて、研究に取り組んでいる。

A-1 学校研究の3つの視点**2 実践内容****(1) 単元の目標**

- ・ 世界の古代文明に関心をもち、古代におけるわが国の歴史の大きな流れについて意欲的に学習している。
(社会的事象への関心・意欲・態度)
- ・ 国家の形成と天皇・貴族の政治の展開のあらましや文化などから課題を見出し、歴史の流れと時代の特色を多面的・多角的に考察している。
(社会的な思考・判断)
- ・ 国家の形成と天皇・貴族の政治の展開のあらましや文化などに関する様々な資料を収集し、適切に選択して活用するとともに、追求し考察した結果をまとめたり説明したりしている。
(資料活用の技能・表現)
- ・ わが国の歴史とかかわる東アジアの歴史を背景に理解し、国家の形成と天皇・貴族の政治の展開のあらましや文化の特色など、その知識を身に付けている。
(社会的事象についての知識・理解)

(2) 指導上の工夫点

- ① 『授業スタイルの定着』をめざした工夫
 - ・ 課題解決型学習を意識化できるよう1時間の授業の流れをフローチャート化
- ② 『学習指導に生かす評価』の工夫
 - ・ 評価観点に基づく支援シートの作成と活用
- ③ 『学習意欲を引き出す資料(活用)』の工夫
 - ・ プレゼンテーションソフトを使った授業
 - ・ ビデオクリップの教材化と授業での活用

B-1 授業のフローチャート化**B-2 支援シート**

3 指導の実際

主な学習活動	支援 (○) 個への支援 (●) 評価 (◇)	学習段階
1. 前時の振り返りを行う。 ・四大文明の名前を確認しよう。 ・それぞれの文明が栄えた場所は何という川の流域だったかな。	○世界地図を見ながら、名称だけでなく位置も確認できるようにする。 ●遺跡の写真を提示する。	導入の段階
2. 縄文、弥生の暮らしについて考察する。 ・ワークシートで現代の暮らしとの違いを見つけよう。 ・違いについて発表しよう。 ・使っていた道具の特色を見てみよう。	●違いを見つける視点を助言する。 ○レプリカや写真資料を提示して、特色がとらえやすいようにする。	把握の段階
課題 日本列島に住む人々の生活は、どのように変化したのだろうか		
3. 縄文と弥生の「むら」の様子の変化を比較する。 ・ワークシートのイラストで、縄文と弥生の「むら」の様子を比べてみよう。 ・見つけた変化をワークシートに記入しよう。	◇縄文時代と弥生時代の「むら」を比較して、生活の変化を考察している。 【ワークシート】 ○支援シートを配布し、考察する視点を明示する。 ●イラストの中で変化に気づいた点に印を付けるよう助言する。	考察の段階

C-1 指導案

4 成果と課題

(1) 成果

- ・生徒の学習課題の把握から課題解決への思考の流れがスムーズになった。
- ・「ねらい」を明確にすることで「つけたい力」が明らかとなり、授業構成や教材、発問の工夫へとつながった。
- ・生徒自身も「ついた力」を実感することができ、学習意欲の向上へとつながった。学年末アンケートでは「社会科が楽しい」と答えた生徒が90%を超えた。
- ・「支援シート」の活用により、資料に対する抵抗感が少なくなり、資料を積極的に読み取ろうとする生徒が増えた。
- ・プレゼンテーションソフトを使用することで複数の資料を融合することができ、効果的な資料提示につながった。

(2) 課題

- ・「考察」の過程の学習（グループ討議の方法、資料活用能力の育成）が不十分であったため、授業の最後まで課題解決意識が持続しないことがあった。
- ・1単位時間のねらいは明確にできたが、単元全体での「ねらい」や分野全体での「ねらい」を明確にしていく必要がある。
- ・ビデオクリップ作成には相当な時間を要するので、個人で作成する方法より、各地区の教育研究会の社会科部会等の組織単位で作成する方法が良いと思われる。

D-1 成果と課題

小中連携による学力の充実と学ぶ喜びを見いだす授業実践

数学 第3学年

小松市立松東中学校・教諭

1 事例の概要

松東中学校では「豊かに生きる力を育む教育活動の充実」という研究主題のもと、小中連携による学力の充実と学ぶ喜びを見いだす授業実践に取り組んできた。

まず、最初に、9年間で松東校区の子どもたちをどのように育てていきたいかを考え、9年間でつきたい力を「自ら学ぶ力」「コミュニケーションの力」「チャレンジする心」の3つとし、小学校と中学校が連携し、力をつけていこうと考えた。

また、基礎学力調査の結果、本校は国語科、数学科、英語科の3教科がやや弱い傾向にあり、重点教科としてあげていた。一方、校区の小学校では、国語科、算数科を学校研究に取り上げて研究を進めている小学校、英語活動に力を入れている小学校があることから、国語部会、算数数学部会、英語部会を持ち、小学校と連携して授業改善に取り組んできた。

授業改善の方法として、生徒自身が自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、問題を解決するためにはどのように授業を工夫していけばよいかを話し合った。その結果、これまでの教師主導型の授業を改め、協同学習の理念を取り入れることにより、生徒同士の学び合いの時間を作ることが大切であると考え、校内で共通理解を図り、4つの視点を設定し授業改善を考えた。

A-1 4つの視点

2 実践の内容

(1) ねらい

本校および校区の小学校で、算数科と数学科の基礎学力調査の分析をした結果、小学校でも中学校でも基礎的な計算はできているが、中学校では、計算の中でも分数や小数の問題、数量関係や等式の変形、小学校では、単位変換や図形の面積や体積を求める問題、その他、記述問題など、応用問題や自分で考えて解く問題、筋道を立てて解いていく問題が弱い傾向にあった。

そこで、筋道を立てて考えたり、説明したりする力、自分で考えて解く力をつけさせようと考え、『考える力を育てる授業の工夫』を小中共通のねらいとした。

(2) 研究の方法

① 4つの視点を考えた授業実践

4つの視点を考えた授業実践を行い、基礎学力の向上を図り、考える力の育成を目指す。

② 小中相互授業研究会と指導案検討会



小中相互授業研究会（本校と校区の小学校でお互いに授業を参観し、授業整理会を行う）や指導案検討会（指導内容、方法など算数・数学部会でお互いに協議し合う）を行い、指導・支援の方法を考える。

③ 9年間の系統表の作成

9年間のカリキュラムの系統を作成し、教師側が見通しを持って指導にあたる。また、単元ごとに児童生徒がつまずきやすいところを抽出し、子供達のつまずきを探る。

B-1 9年間の系統表

3 指導の実際

配時	学 習 内 容 と 活 動	教師の支援と評価 支援 ○ 評価◎
導入	9年間のカリキュラムの系統表を見る。	○これから学ぶことは、小学校からどうつながっているのか、今までに習ったどの学習事項を利用していくのかを確認させる。
展開	<p>それぞれの面積の求め方を発表する。</p> <p>考え方1 考え方2</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">   </div> <p>このことから、$R = 34$になる。</p> <p>3つの正方形の面積の間にはどんな関係が成り立つと予想できますか。 視点①</p> <p>$P + Q = R$を予想する。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>三平方の定理</p> <p>直角三角形の直角をはさむ2辺の長さを a、b、斜辺の長さを c とすると、次の関係が成り立つ。</p> $a^2 + b^2 = c^2$ </div>	<p>○一辺の長さのわからない正方形の求め方を図を書いて説明させる。 視点②</p> <p>○9と25と34の3つの数字から考えさせる。</p> <p>◎三平方の定理を理解できる。 【知識・理解】〔行動観察〕</p> <p>視点① 参加度を高める工夫</p> <p>視点② 協同での学習場面を作る工夫</p>
終結	次時の確認をする。	

C-1 指導案

4 成果と課題

(1) 成果

4つの視点を意識した授業展開をすることにより、生徒が意欲を持って取り組むようになってきた。指導案検討会をおこなって、教師が本時のねらいを明確にすることで、生徒とねらいを共有して授業を進めることができた。また、今日の授業では、このねらいを理解したり達成したりすればよいということが生徒にもわかり、見通しを持たせることにつながった。

9年間の系統表を作成したことで、教師側がどのように学習が積み上げられているのかを理解することができ、指導の見通しが持てた。また、つまずきをいれたことで、生徒がどこでつまずきやすいかを知ることができた。さらに、生徒につけさせたい力が明確になり、とても役立つものとなった。生徒側では、「一つつまずくと後々が分からなくなるから、今しっかり学習しなければ」という気持ちになり、生徒の意識の高揚にもつながっていった。

(2) 課題

4つの視点の中で、「Ⅲ 達成感を実感させる工夫」が十分に取組みできなかった。特に、解けない生徒にどのように達成感を持たせるのが今後の課題である。最後まで解答できなくても、ここまではわかったというように、少しでも「できた・わかった」という気持ちにさせられるように、指導・支援の方法を考えていかなければならない。

9年間の系統表を利用して、生徒自身が自分のつまずきを確認して、そこを学習することで今まで解けなかった問題も解けるようになってきたが、今後、さらに達成感を持たせられるような場の設定や、生徒自身が自分にあった学習方法を見つけることができる手だてを検討していきたい。

D-1 9年間の系統表についての生徒アンケート

科学的な見方・考え方を育成するためのワークシートの工夫

理科 第3学年

小松市立御幸中学校・教諭

1 事例の概要

自然事象に対する興味・関心や知識はあるものの、実生活や授業の中で学ぶさまざまな事象を理論的に考察する能力については年々低下してきているように感じられる。この傾向は定期試験などの記述問題に対する無回答欄の増加として特に目につくようになった。これは生徒が記述問題に取り組むことなく、思考活動自体を放棄していることの表れではないかと考えられる。そこで、科学的な見方・考え方や自然に対する総合的な見方を育成するために、生徒自身が自分の思考の過程を振り返ることができるようなワークシートや映像資料を活用した授業実践を行った。

A-1 事例の詳細

2 実践内容

(1) 単元の目標

- ・惑星の見え方の変化に興味を持ち、意欲的に課題に取り組もうとする。
(自然事象への関心・意欲・態度)
- ・金星の見え方の変化を、太陽・金星・地球の位置関係の変化と関連づけて考えることができる。
(科学的な思考)
- ・金星が恒星の間を動いていく様子を調べることができる。
(観察・実験の技能・表現)
- ・太陽系の天体の名称を知り、その特徴を理解する。
(自然事象についての知識・理解)

(2) 指導上の工夫点

- ・実習の結果を生徒の記憶として残し、必要なときに振り返りができるように、また、直接理論考察ができるように『ワークシート一体型教材』を考案し利用した。
- ・学習課題を生徒の思考活動を促すように多段階に分け「スモールステップ」で考えられるようにした。本時では以下のように（ア）映像資料の提示、（イ）モデル実習、（ウ）理論的考察のステップとし、（イ）モデル実習を活動の中心として据えた。
 - ア 映像資料の提示
金星の観測される位置、満ち欠けを映像資料（デジタルコンテンツ）で確認する。
 - イ 模型によるモデル実習
ワークシート一体型教材を用い、金星の満ち欠けの実習を行う。
 - ウ 理論的考察
プレゼンテーションソフト補助資料を用いて満ち欠けの原理を考え、答え合わせをしながら知識の共有化を図る。
- ・学習課題に対して多面的に考えることができるように、モデル実習を2人1組のグループとし、金星の見え方について、地球上の観測者からの視点と宇宙からの視点の違いを実感できるようにした。

B-1 単元計画

3 指導の実際

学習内容	生徒の学習活動	教師の指導・留意点	評価規準
①映像資料の提示（現象の認識）	・映像資料をもとに実際に観察される金星の形や大きさの変化を確認する。		
②模型によるモデル実習	・模型を使ったモデル実習を行いワークシートに記述する。	・模型の使い方や見方を机間指導する。	・積極的に実習に取り組んでいる。 (自然事象への関心・意欲・態度)
③理論的考察	・結果を発表しあい、プレゼンテーションソフト補助資料を使って金星の見え方の変化の原因を考える。	・観察（実習）で得られる結果と理論考察での視点の違いに気づかせる。	・天体どうしの位置関係と見え方の違いが考察できる。(科学的思考)

C-1 指導案

C-2 ワークシート

C-3 プレゼンテーションソフト補助資料

4 成果と課題

(1) 成果

今回の実践を行った生徒達の授業への取り組みは非常に静かで落ち着いたものである。しかし、4月当初は教師の問いかけに対しては控え目な生徒が多く、自分が指名された時だけ考えているような印象であった。自然現象に対しても深く考えることなく「あたりまえのこと」として捉えてしまう生徒が多く、理由を考えさせると「難しくてわからない」と投げ出してしまいがちであった。

今回の実践は、生徒の科学的な思考力を養うことを中心にすえたものであるが、スモールステップとデジタルコンテンツを採り入れ、各々の場面で一工夫することによって生徒の理解をさらに促し、科学的な思考力を伸ばすための手段となりうるということがわかった。特にスモールステップの形に授業展開を構成し、各ステップごとに個に応じたコメント（評価）を返しながらか、ヒント（支援）を与えることで、考えることが苦手な生徒の思考を深められたように感じる。さらに、生徒個々の思考力だけではなく、生徒全体の授業に対する姿勢にも好影響を与えていると実感している。本実践のような取り組みを継続することによって、教師と生徒もしくは生徒どうしの授業の中での会話のキャッチボールが行われるようになり、本当の意味での「主体的な学習」が少しずつできるようになった。

今回記述したのは天文分野についての取り組みであるが、今後は、その他の分野においても各単元の特色を活かし、「なぜ・どうして」を自ら主体的に考えることができる生徒を育成していきたいと考えている。

(2) 課題

理科の学習を通して、普段の生活の中から「なぜか」という疑問を持ち、その疑問を課題として解決しようとする姿勢を身につけさせていきたいと考えている。そのためにも単元の特性に応じて、様々な手法で科学的思考力を養う場面を設定した授業設計が必要である。今回用いたデジタルコンテンツはそのための一手段であり、動画素材やシミュレーションなど、他の教材にはない活用の幅があることが特徴である。これらの良い部分を選び、実習と合わせて利用するなど適切に活用することで、よりわかりやすく、生徒一人一人が興味を持って参加できる授業が展開できるものと考えられる。そして、そのような授業の中でこそ科学的な思考力を養うことも可能であろう。ただ、映像資料を用いる場合、映像に踊らされて「わかったような気がする」授業にならないように留意することが必要である。生徒の思考力を高め、確かな知識として身に付くようなデジタルコンテンツの活用方法を探っていくことが今後の課題である。

事例23 題材（ギターのリズム）

「山の音楽家」のメロディーを弾こう

音楽 第3学年

白山市立松任中学校・教諭

1 事例の概要

器楽活動の授業は、楽器を弾くための技能の習得だけの授業になりやすい。そのため「楽器が弾ける」だけでなく、「良い音色を意識して演奏できる」ことを目標とした授業づくりを行ってきた。今回ギターの活動を行うにあたり、一人1本ギターがもてる恵まれた環境にある本校の特色を生かして一人一人が自分にあった練習方法を自分で考えて行える授業づくりを目指した。そこで鑑賞教材の導入や範奏を通して「良い音色」をイメージしながら取り組み、意欲的に器楽活動ができるようにこの事例に取り組んだ。

2 実践内容

(1) 題材の目標

- ・よい音色作りを工夫して簡単なメロディーの曲を演奏することができる。
- ・ギターの奏法を理解し、音色の特徴を感じ取って演奏を聴くことができる。

(2) 指導上の工夫点

① 意欲的に活動を行うための工夫

＜鑑賞活動によるイメージ作り＞

第1次でDVDやCDの視聴覚教材を用いた鑑賞活動を行い、「どのように演奏しているのか」という視覚面と「音色」の聴覚面から楽器への関心を高めた。プロの演奏を見ることにより「自分もあんな風に弾きたい」という興味を引き出し、意欲的に演奏活動に取り組めるようにするとともに、第2次からの活動の際に「出したい音」をイメージできるよう工夫した。

＜「見比べる」「聴き比べる」活動＞

範奏と自分の演奏を「見比べる」活動や音を「聴き比べる」活動を通して、「自分が目指す音色はどうすれば出せるのか」を考え表現の技能をもたせながら、一人一人が自分の技能にあった課題を設定できるようにした。

範奏する際は2通りから3通りを示し、そのよさや違いを聴き比べられるようにしながら、今の自分により近い演奏の姿に気付かせ、改善点を自分の力で見つけられるよう配慮した。

② 評価の工夫

＜個別指導の活用＞

授業の中で数回に分けて適宜個別指導を行った。注意して弾くポイントを伝えた上で、演奏を一人一人評価すると同時に、さらに演奏の技能が上がるための助言を行った。生徒の楽器を使って範奏することで身近に自分の演奏との違いを見比べることができるようにした。

＜課題を持たせた評価カードの記入＞

授業の反省は「今日自分ができたこと」「苦労したこと」を文章で書くように指導した。自ら課題を見つけることを重視していたので評価のポイントを教師から提示せず、「次の時間はどうなりたいか」自分で考えた自己評価をもとに、一人一人の技能にあった課題を自ら設定するよう促した。

B-1 自己評価カード

3 指導の実際

配時	学習内容	生徒の活動(・)と動き(○)	支援(・)と評価(◎)
導入 (15)	基礎練習	・既習曲を練習する	・机間指導し、個別に助言する。
展開 (25)	本時の学習の確認 曲の練習 全体であわせる	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">「山の音楽家」を演奏してみよう</div> ・個人練習 ○ポジションはどこかな ○どうやったらうまく弾けるかな ・遅いテンポで全体であわせる ○うまく押さえられない	・ポジションを確認しながら練習するように伝える。 ・自分で弾けるテンポで練習するように伝える。 ・机間指導し、個別に助言する。 ・範奏を用いて運指のポイントを確認する。 ◎正しいポジションを理解して演奏している。(観点3：表現の技能)
まとめ (10)	まとめ	・評価カードの記入 ○もっとうまく弾きたい	・苦勞した点などを具体的に評価カードに書かせる。

C-1 指導案

C-2 楽譜

C-3 運指表

4 成果と課題

(1) 成果

- ・第1次の鑑賞活動でギターを自分なりにイメージできた生徒が多く、感想カードなどにおいても自分自身の言葉で音色の特徴を書いていた。
- ・第1次の学習を経て実際にギターを弾く授業に移った時に、自分なりに音色がイメージできたため「どうやったらいい音で演奏できるだろう」と考えながら練習する生徒が多かった。
- ・個別の助言を通して、一人一人が自分に足りない部分や工夫が必要な部分を理解しながら練習することができた。
- ・今回は簡単なメロディーのみの曲を使ったが、難易度の高いメロディーに挑戦したり、コードを弾いてみたいという意欲の高い生徒も見られた。
- ・評価カードでは「～ができてうれしかった」「次はもっとうまく弾きたい」といった感想が多く、また、「ギターを買って練習してみたい」という生徒もおり、ギターに対して興味・関心をさらに深めることができた。

(2) 課題

- ・奏法について教師から丁寧に説明しすぎた。そのため生徒からの発言の場が少なかった。
- ・範奏で曲を聴く活動を行ったが、曲そのものを知らない生徒にとっては曲の練習の際にリズムがわかりにくく苦勞していた。
- ・グループ練習の時間を設け、生徒自身が教え合いながら練習する場面があってもよかった。

事例 24 題材「鑑賞・作品との対話から」～見て、感じ取り、自分の言葉で発信する力の育成～

風景版画今昔 ＜葛飾北斎と鈴木英人＞

美術 第3学年
石川県立金沢錦丘中学校・教諭

1 事例の概要

本校では、今年度の学校研究テーマである「PISA型読解力の育成」を目指して各教科で実践に取り組んだ。美術科では、鑑賞における言葉による表現力の向上を図るために、造形言語を用いた言葉で表現する鑑賞活動を設定した。作品を見る視点を整理し、気付いたことや感じ取ったことを言葉で表すことによって作品の見方や感じ方を豊かにしていくことがねらいであるが、造形言語を重視した「言葉による表現活動」が、絵画や彫刻・デザインや工芸などの表現活動にもフィードバックされると考えた。表現と鑑賞を関連付けながら、創造的な行為として鑑賞活動を積極的に行い、生徒が自分なりの価値をもって作品を鑑賞し、他者の見方や感じ方を尊重し、鑑賞を深められるようにしたい。

本事例では、非連続テキストである美術作品を鑑賞し〔情報の取り出し〕、鑑賞した題材について気付いたことや感じ取ったことを造形言語を駆使して表すこと〔解釈〕、意見交流で自分の解釈に新たな見方や考え方を加えて統合的に判断すること〔熟考・評価〕をもとに、【鑑賞の能力】における「確かな学力」を身に付けさせることができたかについて考察した。

A-1 学校研究

2 実践内容

(1) 題材の目標

- ・ 版画作品を味わい、作品に対する自分の解釈と他者の解釈を比較し、鑑賞活動の広がりを楽しもうとする。 【美術への関心・意欲・態度】
- ・ 版画作品の特徴とよさや美しさを自分なりに捉え、その根拠を造形言語（主題・構図・色彩・形・技法などの造形要素を表す言葉）で表現し、コミュニケーションを通じて視野を広げながら、作品に対する見方・感じ方を深める。 【鑑賞の能力】

(2) 指導上の工夫点

① 題材の精選

- ・ 生徒も必ず目にしたことがある「葛飾北斎の富嶽三十六景」を選定
- ・ 「赤富士」による自然現象と版画表現との比較
- ・ 「凱風快晴」の初摺りと後摺りの比較と分析
- ・ 現代版画「鈴木英人の作品」との比較

② 作品の提示方法

- ・ ICT機器（ソフト面：画像表示ソフト、ハード面：電子情報ボード等）の活用と工夫

③ 作品資料の活用

- ・ 作品集等の書籍資料を活用した図書館との連携

B-1 指導上の工夫点

3 指導の実際

時間 (分)	学 習 内 容・活 動	指 導 上 の 留 意 点	評 価 規 準 【観 点】(評 価 方 法)
5	・浮世絵版画を鑑賞し、気付いたことや感じ取ったことを発表する。	葛飾北斎の作品を鑑賞しよう。 ・気付いたことや感じ取ったことを自由に発表させる。	・浮世絵版画に関心をもち、よさを味わおうとする。 【美術への関心・意欲・態度】 (行動観察)
10	・浮世絵版画を鑑賞し、気付いたことや感じ取ったことを書く。	造形要素に注目して 気付いたことを書こう。 ・〈主題〉〈構図〉〈色彩〉〈形〉〈技法〉などに着目して考えさせる。	・作品の特徴を自分なりに捉え、その根拠を造形言語を用いて使って表す。【鑑賞の能力】 (ワークシート)
10	・気付いたことや感じ取ったことを発表しあう。	・意見交流の場を設け、造形的な要素を意識して表すことができるようにする。	
15	・浮世絵版画と現代版画の共通点と相違点を見つける。	浮世絵版画と現代版画の共通点と相違点を見つけよう。 ・同じ富士山を扱ったシルクスクリーン版画と比較し、表現の違いに気付かせ、それぞれの表現のねらいを味わえるようにする。	・浮世絵版画と現代版画を見比べて、共通点と相違点に気付き、それぞれのよさを味わおうとする。 【美術への関心・意欲・態度】 (行動観察)
5	・学習のふりかえりをする。		

C-1 指導案

C-2 ワークシート

C-3 作品資料

4 成果と課題

(1) 成果

葛飾北斎について、ほとんどの生徒は名前は知っていたが、作品については詳しくは知らないという生徒が多く、浮世絵という日本の代表的な版画に生徒がどのような反応を示すか興味深いものがあった。最初に「山下白雨」を取り上げ、あえて事前に作品を解説せずに生徒の率直な感想を聞いたところ、山肌の色や雷の描写に関心が集まったが、それ以上の深まりは見られなかった。次の「凱風快晴」では、実際の自然現象である『赤富士』の写真を見せたことに強い反応が見られ、それを作品にした北斎の浮世絵に強い関心を示した。さらに、初摺りと後摺りのどちらも本物の「凱風快晴」を見せ、その違いを見比べながら鑑賞のポイントを示した。造形言語による感想がどの程度見られるかが焦点であったが、予想以上の言葉による表現が見られた。構図の面白さ・色彩の変化・形の特徴についての感想や、初摺りと後摺りの違いと好みについての意見も幅広く見られた。さらにこの活動を受けて、富士山を共通題材とした現代版画のシルクスクリーン作品との比較では、色彩や描写方法の違いに注目した意見が多く見られた。二次では、画集から好きな作品を選んで鑑賞カードを書く活動を行ったが、造形言語による表現が感想に活かされており、取り組み前と比較すると抽象的な表現の感想が減少し、より具体的な言葉の表現による感想が増加した。

(2) 課題

造形言語による表現は普段の授業でも心がけていることだが、生徒に実際どの程度意識付けられているのかは判断が難しいところであった。今回の取り組みから、造形言語を活用する学習が反映されていることを確かめることができたが、今後も造形言語の意識を高めていき、また作品を読み解く力身につけさせていくために、表現活動・鑑賞活動の両面からの働きかけを続けなければならない。

D-1 考察

スピード感のあるハードリングを引き出す授業

保健体育 第2学年

かほく市立河北台中学校・教諭

1 事例の概要

本校では文部科学省より指定を受け、平成17年度より「確かな学力を身につけ、心豊かに行動できる生徒の育成」を研究主題として研究に取り組んでいる。保健体育科では、「自発的・自主的活動を促進し、確かな学力の育成を図るための学習方法の工夫」を教科目標とし、実践を積み重ねてきた。

本校の生徒は積極的に授業に取り組む様子が見られるが、生徒同士の関わり合いや教え合いはまだまだ十分とはいえない。また、基礎基本の練習を進めていく上での、課題解決型学習や、その運動の特性にふれるような深い学びの経験が少ない。そこで本実践では、陸上競技の中でも特に難しい技術が多いハードル走に重点を置いた。ハードリングフォームを部分的、形式的に取り扱うだけでなく、スピード感のあるハードリングを体験すること、3歩のリズムの中で感じられる爽快感やできたという喜びをあげることなど、掘り下げた授業を通して得る満足感・達成感、わかる楽しさなど、生徒達の気づきを大切にしたい授業の必要性を感じ、授業実践取り組んだ。

2 実践内容**(1) 単元の見どころ**

- 互いに協力して練習や競技を行うとともに、練習場や用具の安全に気をつけて運動できる。
(運動や健康・安全への関心・意欲・態度)
- 自分や仲間の動きの問題点を具体的に指摘し、練習方法を工夫して取り組む。
(運動や健康・安全についての思考・判断)
- 自分や仲間が課題を持って学習に取り組み、その技能を高めたり、競技したりして記録を向上させることができる。
(運動の技能)
- 各種目の測定方法やルール知るとともに、運動の楽しみ方や学び方が理解できる。
(運動や健康・安全についての知識・理解)

(2) 指導上の工夫点**① 学び方の工夫**

生徒同士の関わり合いのある授業を展開するために、ペアやグループによる教え合いや、できばえのチェックをお互いに行わせた。その際、運動の技能が漠然としていると、生徒間で技能を見合うといった活動は難しくなるので、できる限り技能の具体化をはかるために資料を提示した。また、お互いがチェックしあえるようにし、ねらいを明確して取り組んだ。

② 練習の場の工夫

はじめは1レーンにハードル2台、慣れてきたら高さを一段上げる。次に、もう一度高さを低くしてハードル3台、慣れてきたらまた高さを上げる。このような手順を繰り返すことで、最終的に50mハードルを行う上でのプレッシャーを少しでも軽減した。また、特に運動を苦手と感じている生徒への個別指導として、ハードルをウレタン製の物にしたり、ハードルを使わずに段ボールを使ったり、ミニハードルを使った取り組みも行った。ミニハードルを利用する際は、3足長や4足長程度間隔をあけて並べるといった方法でも取り組んだ。またハードルが苦手な生徒に対しては、個別指導も併せて行った。

③ 学習カードの活用

学習カードでは自己評価だけでなく、ペアでの相互評価ができるようにチェックポイントをわかりやすく具体的に示した。また、最終的にはいかに50mフラット走に近づけるかが課題であるので、50mフラット走から導き出される目標タイムや、得点表を配布しやる気を引き出した。

B-1 学習カード

B-2 単元計画

B-3 年間指導計画

B-4 得点表

3 指導の実際

学 習 活 動 予想される生徒の反応 (◇)	教師の支援 (・)
<p>本時の学習の確認をする。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center; margin: 10px 0;"> スタートから第一ハードルまで、8歩間でスピードを落とさずに跳ぼう。 </div> <p>課題解決に向けた取り組みをする。 ◇8歩でいける距離を見つけ練習する。</p> <p>スタートからの距離11m、12m、13m。インターバルは7m。(2台目まで)</p> <p>◇いかにスピードを高められるか練習する。</p> <p>◇振り返り</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・踏み切りたい脚を前にしてスタートすることを確認する。 ・第一ハードルまでのスピードが記録に影響すること、跳ぶことがブレーキになることを理解させる。 ・30mにゴールラインを引きゴールまで全力で走るよう促す。 ・ペアの生徒に隣のレーンでフラット走をさせ、スピードにのった走りを引き出させる。 ・必要であれば活動途中に全員集合させ、どうすればスピードがつくか上手な人からヒントを探る。

C-1 指導案

4 成果と課題

(1) 成果

- ・スピードを重視したハードルの授業ということで、何度もペア同士でハードル走とフラット走を併走させた。そのことで、大多数の生徒がスピードを落とさないでハードルを跳ぶにはどうすれば良いか考えながら取り組むことができた。さらに、考えるだけではなくアプローチや接地後のブレーキングを実際に感じることで向上心を持って取り組む様子が見られた。
- ・第一ハードルまでを8歩と限定することによって、課題がより具体的となり一生懸命取り組む様子が見られた。
- ・ペアでの学習を通してお互いの技能を見合う中で、関わりあう様子が見られた。
- ・気軽に話せる生徒同士の教え合いでは、難しい専門的な言葉ではなく、自分たちが理解しやすいような言葉を用いてアドバイスできていた。

(2) 課題

- ・身体的な特徴として柔軟性に乏しい生徒には、柔軟やトレーニング方法を紹介したが短時間の練習ではフォーム作りの徹底はできなかった。特に、抜き足を横から抜くという動作に対しての練習の必要性を感じた。
- ・学習を進めていくにあたり、生徒の実態を把握した上で、より質の高い課題を追求させたい。

実生活や環境問題に目を向けた材料学習技術・家庭（技術分野）第1学年
津幡町立津幡中学校・教諭**1 事例の概要**

大量生産・大量消費の時代と言われて久しく、身近に多くの物があふれている。しかし、私たちの生活が便利になる一方で、ものづくりや生活体験の不足、物を大切にすゝる気持ちの希薄化、環境問題の深刻化など、様々な問題もある。生徒は、理科や社会や総合的な学習の時間で地球規模の環境問題についての知識はあるものの、身の回りにある金属やプラスチックの特徴、ごみの分別や処理についての知識は乏しい。

そこで、私たちの身の回りにある製品の材料学習やその材料の特性を生かした設計を通して、実生活や身近な環境問題に目を向け、賢い消費者や生産者としてのあり方を考え、物を大切にすゝる心を育み、ものづくりへの製作意欲につなげ、学習したことを生活に生かす実践的な態度を養いたいと考え、取り組んだ。

2 実践内容**(1) 題材の目標**

- ・身の回りの製品と材料との関わりや、環境への影響について意欲的に調べようとしている。
(生活や技術への関心・意欲・態度)
- ・身近な生活と結びつけて、製品の使用条件・使用目的に合った材料や、材料の特徴などを考えることができる。
(生活を工夫し創造する能力)
- ・製品をキャビネット図で描くことができる。
(生活の技能)
- ・木材・金属・プラスチックの特徴や性質を説明できる。(生活や技術についての知識・理解)

(2) 指導上の工夫点**① 実生活に結びつけるための評価の工夫**

実践的な態度を養うことができるよう実生活から課題を見つけ、授業で学んだことを実生活にフィードバックさせる習慣を身に付けさせるための評価活動を行った。毎回の授業の振り返りに「身近な生活と結びつけて考えることができたか」という4段階評価と、「今後の生活へ生かせそうなこと」を記述する欄を設けた。

② 実生活や環境問題（循環型社会）との関わりを生かした学習

実生活でよく使われている材料や製品の使用条件、使用場所などを生活経験に照らし合わせて考えることにより、金属・プラスチック・木材等の材料特性やよさを引き出せるようにした。また、それらの材料をただ利用するだけでなく、どのように生産され、利用後はどのように処理されるのかという循環型社会についての意識やごみの識別マーク、リサイクルの効果を紹介することにより、ごみの分別や環境問題への意識が高められるような学習内容にした。

③ 問題解決的な学習

生徒自身が自らの力で、生活をする上での課題を解決できるようになって欲しいという願いから問題解決的な学習を多く取り入れるようにした。そこで、課題を解決するための思考の流れをスムーズにさせるため、生徒の実態を正確につかむ必要があったことから、生活経験を把握するためのアンケートの実施や他教科の学習内容との関連付け等を行った。

3 指導の実際

(1) 小題材名 木材の強度を調べよう

(2) ねらい 木目（繊維方向）の違う棒材の強度を予想し、木材の強度について調べよう

段階	配時	学習活動と予想される生徒の反応 (○)	支援 (・) と評価 (◎)
つかむ	10	1、前時の復習をする。 ○板目板は変形しやすく木表側にそる。 ○柂目板は高い。 ○辺材は水分が多い。 2、本時の課題を確認する。 課題：木目の違う2種類の棒材の強度を調べよう。	・板目板と柂目板を見せたり、木材の切り株を見せながら木材の名称の確認を簡単に行う。 ・同じ板から採った材料であることを確認しておく。
追究する	15	3、2種類の棒材の違いを調べる。○木目・太さ・長さ 4、どちらが折れやすいか予想し、理由を記入する。 5、人数の確認の挙手をする。 ○どちらも半々くらい 6、理由を発表する。 ○A→長くて細いから ○B→木目が折る方向と同じだから	・各列に2本ずつ棒材を準備。 ・日常生活の中から理由を考えるよう促す。 ・Aの理由から発表させる。

C-1 指導案

C-2 本時のワークシート

4 成果と課題

(1) 成果

- ・本題材の授業後に学習内容に関するアンケートを実施した。そこでは、環境（特にごみ問題）に対する意識と材料の特性を理解しておくことや材料の選択の大切さなどが高い数値を示し、環境問題や材料についての学習の意義があったようである（資料D-1）。また、生徒の自己評価の記述内容では、授業を重ねるに連れて、実生活と結びつけることができるようになった生徒が増え、実生活との関わりについて書く内容にも深まりが増すようになっていった。
- ・授業の振り返りで、「授業において、生活と結びつけて考えることを意識している」という事後アンケートにおいて、他教科より技術の授業が高い数値を示した。また、「技術の授業で学ぶことは、生活に役立ちそうである」という項目に関しては、約70%以上が肯定的な意見を持っていた（資料D-2）。自己評価で、実生活にフィードバックさせることで、実生活を意識しながら授業を展開することができた。
- ・問題解決的な学習やたくさんの教具を見せたり、実験を行った授業では、学習内容に関する自己評価項目の値が高い傾向を示した。

(2) 課題

- ・生徒の金属やプラスチックについての学習では、知識が乏しいため説明が多くなりがちであった。生徒からの意見が引き出しにくい内容に関しては、実験や教具の工夫をし、専門的な技術に対する好奇心を高め、ものづくりや科学技術への関心を高めさせたい。また、授業で学んだことや高まった意識を、実生活で生かし実践できるような目に見える具体的な取り組みが必要である。
- ・生徒のものづくりの経験が少ないため、材料についての学習は生産者というより消費者としての視点が実生活と結びつけやすかった。しかし、利用するだけでなく生産・処分するという営みがないと社会は成り立たない。限られた時間の中で、生活の実態と社会の実態、将来のものづくりの技術発展などを踏まえ、広い視野に立って、中学生が学習しておくべき内容を検討していく必要がある。

D-1 学習内容に関する事後アンケート

D-2 実生活との関わりに関する事後アンケート

事例27

題材「わたしたちのより豊かな食生活」

食生活をより豊かにしようとする態度をめざして 手作り会食の実践を通して

技術・家庭（家庭分野） 第2学年
能美市立辰口中学校・教諭

1 事例の概要

現代の食生活は多様化・複雑化している。その中で手軽に購入できる食品を好み、お腹がふくれる食事であればいいと思っている生徒も多い。食事の大切さや意味を理解し、自ら食事を整えることができる生徒を育てたいと考えている。

また、現代の食生活の問題点のひとつに孤食も取り上げられている。そこで手作り会食の実践に取り組み、人と人が飲食を共にすることによって交流の場がなごやかになり、心身共に満たされた気持ちになることを理解させたい。会食後には参加者から評価をしてもらうことで、生徒に達成感を味わわせ、さらなる会食への意欲を高めると共に、自分の食生活に目を向けさせ、豊かな食生活をめざそうとする態度を育てることをねらいとした。

2 実践内容

(1) 題材の目標

- ・会食の計画や実践に関心をもって取り組み、学んだ知識と技術を活用しようとする。
(生活や技術への関心・意欲・態度)
- ・会食の目的に応じ、課題をもって計画や実践を工夫する。
(生活を工夫し創造する能力)
- ・会食の目的に応じ、計画を立てて実践することができる。
(生活の技能)
- ・会食の献立の基礎的な知識と作り方や会食でのマナーについて理解する。
(生活や技術についての知識・理解)

(2) 指導上の工夫点（視点）

① 学習への意欲をもたせる工夫

決められた献立ではなく、班ごとに炊き込み飯の具とつけ合わせについて考えさせた。他の班とは違うメニューにすることで、自分たちで作り方を調べ、おいしく作ろうという意欲が高まるようにした。また、招待状やメニュー表などのカードを製作させ招待者に渡すことで、多くの工夫をしたり、招待者を喜ばそうと思ったりと、製作意欲が高まることを目指した。

② 他の時間や学校内の職員との交流・連携を生かす工夫

会食の時間をゆっくり確保するため、給食の時間に会食を行った。給食は主食を除いてもらい、当日の給食と合わせて献立を計画させた。会食に招待する人は学校内の職員とし、生徒が交流を深めたい人や話してみたい職員と会食を行うことで、生徒の意欲を喚起するようにした。

③ 評価の工夫

目標がはっきりと分かるように黒板やワークシートに明示し、授業の度に生徒の自己評価を行わせる。評価の観点は1時間に多くても2観点とし、時間ごとの観点の明確化をはかった。また、会食のときに会食参加者の職員に評価表を渡して評価をしてもらい、その評価は生徒に返した。自分たちがもてなした会食についての見直しに使うと共に、生徒の次の実践へつなげることをねらった。

B-1 題材の指導と評価計画

3 指導の実際

配時	学習活動	指導上の留意点	評価場面・評価方法
5	本時の学習内容を知る。 「お世話になっている先生を招いて楽しい会食をしよう」	・楽しい会食になるようマナーなどを意識することを確認する。	
50	炊き込み飯とつけ合わせを作る。 ・安全面と衛生面に気を配りながら能率よく実習する。		評価場面 調理実習と会食をする場面
15	招待する人が楽しく会食できるようなテーブルセッティングと盛りつけや配膳を行う。 ・製作したメニュー表、座席表、箸置きなどをセッティングする。 ・盛りつけ方を工夫し、配膳する。	・会食する場所は家庭室のため、製作・実習してできたものを運ぶことを知らせる。 ・招待する先生を家庭室に案内する。	評価の観点・方法 関心・意欲・態度③ 調理実習と会食に関心を持って取り組もうとしている。 【行動観察】 生活の技能③ 調理や盛りつけ、配膳ができ、会食が実践できる。 【行動観察】

C-1 指導案

C-2 会食評価表

4 成果と課題

(1) 成果

炊き込みご飯の具や付け合わせのメニューの工夫、調理から、お礼のメッセージ作りまでを、自分たちで工夫しながら行えたことで、生徒は意欲的に取り組んでいた。特にカード作りでは、工夫をこらし、良いものを手渡そうと製作している生徒が多かった。授業の前後に行ったアンケートでも、意欲の継続が確認できた。また、毎時間の評価を明確化しワークシートに示したことで、生徒は何をすればよいか理解しやすくなり、意欲の継続に効果的だった。

給食と調理実習の献立を合わせたことで、時間的にも献立内容としても充実した会食ができた。生徒は会食場所が家庭室であったり、1班に1人の職員を招いたりしたため、初めは緊張していたが、招待した職員との会話や交流が進むにつれ、楽しく会食しているようだった。また、会食参加者から評価をもらったことで生徒の励みにもなり、次時の「家庭での実践メニューを考える」学習への意欲が高まった。

(2) 課題

招待状のカードや小物作りでは時間に余裕がなく、生徒の豊かな発想を充分生かすだけの時間が当てられなかった。来年度は年間計画を再検討し、時間数確保、製作するものや会食の内容の充実を考えていきたい。

会食前後の調査では、「家庭でも取り組みたい」にはそれほど変化が見られず、授業中の意欲が生活での実践につながったとはいえない。会食の意味を理解し、もっと実践してみたいと思えるような会食の方法を再検討する必要がある。来年度は調理する献立の内容を変えたり、招待する人を増やしたり、自己評価や会食参加者からの評価などの項目を検討し直すことで、実生活へのつながりをさらに考えていきたい。そして会食の家庭での実践レポートを課題とするなどして、家庭との連携もはかっていきたい。

D-1 会食に関するアンケート・自己評価結果

話すことや聞くことから書くことへ

英語 第3学年

野々市町立野々市中学校・教諭

1 事例の概要

実践的コミュニケーション能力の基礎を養うために、話すことや聞くことを中心として表現力をつけるための工夫を日常の授業で実践している。しかし、実際には、質問に対して単語や単文で応答できても正確で完全な英文で答えられず、中心となる答え以外に補足説明などができない生徒が多かった。さらに、あるテーマに沿って表現しようとする、語彙・文法・文の構成などの負担が大きいことに加えて、自分の考えをまとめることに慣れていないことから、一定の時間内に内容豊かなまとまりのある文を書ける生徒は1割にも満たなかった。中には、全く何も書き出せない生徒もいた。

そこで、実際にまとまった英文で自分の考えや気持ちなど、言いたいことを話したり、書いたりして表現できるようにするためにはどうしたらよいか継続的に取り組むこととした。新出言語材料を適切に用いて正しく表現する練習を充実することと並行して、まとまりのある例文を何度も繰り返し使うことで徐々に文の構成や表現方法などの技法を知り、表現力がつき、ある程度の分量を書けることが自信になって書く意欲につながるのではないだろうかと考え、話すことや聞くことから書くことへとつなげる指導法を工夫した。

2 実践内容

(1) 単元の目標

- ・自分の学校を紹介する活動等で、自ら既習表現を使い、伝え合おうとする。
(コミュニケーションへの関心・意欲・態度)
- ・have been to, It is ~ for ~ to, how to等を用いて、印象に残る場所や学校生活等について互いに質問や応答をしたり、読み手を意識しながら文のつながりや構成を考えて文章を書くことができる。
(表現の能力)
- ・ウェブサイトにある学校向けプロジェクトについて説明している場面の対話文の概要、要点を理解できる。
(理解の能力)
- ・have been to, It is ~ for ~ to, how to等を用いた文の意味・形・用法を理解し、適切に運用できる。
(言語や文化についての知識・理解)

(2) 指導上の工夫点

① “Let’s Speak English”タイム

授業の最初の3分間で1つのテーマについて下記の4つのサイクルを1ヶ月程度継続させ、このサイクルを繰り返す。

- ・1つのテーマに沿った対話文の練習を繰り返し行う（穴埋めワークシートの活用）
……………形式の指導
- ・対話の答えの部分をまとめ、スピーチをする（応答文をまとめたスピーチ形式）
……………内容の指導
- ・スピーチに追加や変更をして5～6文程度にまとめて書く（ブレインストーミング）
……………論理的構成の指導
- ・違うテーマで応用した文章を書く（新しいテーマへの適用）
……………応用の指導

- ② 教科書本文を用いたスキットやロールプレイ
 - ・教科書本文の内容に類似した短いスキット作り
 - ・穴埋め型のスキット作り
 - ・自由なスキット作り
- ③ 評価の工夫
 - ・インタビューテスト（パフォーマンステスト）
 - ・進歩の状況が分かりやすい励みとなる評価（自己評価、相互評価）
 - ・採点基準の事前通知（教師による評価）

B-1	“Let’s Speak English”
------------	------------------------------

B-2	形式の指導
------------	--------------

B-3	論理的構成の指導
------------	-----------------

3 指導の実際

- ・”Let’s Speak English”タイムの継続 — 毎時間 —
- ・新出文型を取り入れたスキット — 第1・2・3次の1時 —
 《Have you ever visited Osaka? に続けて会話をしてみよう。》
 《恐怖の体験「～がこわい」という会話を完成しよう。》
 《新しいことにチャレンジ（how to+動詞の原形の導入）》
- ・教科書本文の聴解、読解 — 第1・2・3次の2時 —
- ・単元のまとめの作文 — 第4次 —
 《学校の紹介文を書こう》

C-1	指導案（単元計画）
------------	------------------

C-2	指導案（本時）
------------	----------------

4 成果と課題

(1) 成果

生徒は練習した英作文はほぼ覚えて言えるようになり、書くこともできるようになった。ブレンストーミング、文の構成、及びモデル文の練習をすることで、論理的思考の育成のための土台作りとなったようである。まとまりのある文とは何かをつかみ取らせることができたので、英文を書くことへの抵抗感が減った。今では次のテーマが早くほしいと挑戦意欲が高まった生徒もいる。

文型の導入などで、ロールプレイやスキットを継続して取り入れてきたことにより、多様な表現を使えるようになってきた。ALTとの対話でも臆せずに話す生徒が増え、インタビューテストにおいて「いろいろな質問に答えられるようになりたい」「質問もしたい」という動機付けにつながった。

(2) 課題

新しいテーマで書くことになったときにどこまで対応できるかは、この学年ではまだ検証されていないので、今後も基本となるモデル文をもっと多様なパターンで練習し、様々な文が書けるかどうか検証する必要がある。また、パターンを利用した作文を使つての対話からスピーチの段階をさらに、時間をかけての自由作文、読みものの要約や感想文、ディスカッション、ディベートの活動へ発展させたい。

必要な語彙、綴り、文法などの言語知識が不足しているため、本当に書きたい自分の気持ちや考えはまだ書けない。日常の授業で、基本的な文法事項と語彙、多様な表現方法などの知識の定着の工夫が必要である。

D-1	作文例
------------	------------

D-2	意識調査結果
------------	---------------

「心に響く道徳」の授業実践

道徳 学年2 学年

白山市立北辰中学校・教諭

1 事例の概要

発達段階とはいえ、他人を平気で傷つけてしまったり、生命を軽視するような言動をとる生徒、親に対して暴言を吐いてしまう生徒の姿を見るたびに、「命はかけがえのない大切なもの」「親の無償の愛」をどれだけ感じているのだろうか、考えてしまうところがある。まして、最近の報道を見ると、暴力や虐待、重過失で子どものみならず人の命を奪う事件が後を絶たない。

そこで、この時期だからこそ生命の尊厳に気づかせるとともに、多くの人たちの愛に育まれて生きているということを深く、じっくりと考えさせたいと思い、2時間のプログラムを組んだ実践である。

2 実践内容

(1) 主題設定の理由

私たちは平穏な生活を送っているとき、生命の尊さや生きることのすばらしさを実感することは少ない。また、これまでに多くの愛情を受けて、ここまで育ってきていることを感じることも少ない。それに加えて、「生命の大切さ」を訴える情報番組もあるものの、暴力や虐待、重過失で人の命が奪われてしまう報道は毎日のように流れている。このような中、生徒の言動を見るにつけ、「生命の尊さを理解し、かけがえのない自他の生命を尊重する」道徳性を育てなければならぬとつくづく感じてしまう。もちろん、受けてきた愛情や生徒自身の経験、積み重ねによって個人差もある。そこで、「命はかけがえのない大切なものだ」ということを時事問題を通して考え、さらに「自分が育てる立場になったらどうか」「自分はどのような生き方をしていくか」と深く考えることを通して、生命に対する畏敬の念を深化させるとともに、自己を見つめ、他を認めながらよりよい関わり方を実践する力を育てたいと考え、この主題を設定した。

(2) 指導上の工夫点

①複数時間（2時間）による設定

1次 ドイツでかなり普及し、最近日本でも話題となった「赤ちゃんポスト」を取り上げ、「赤ちゃんポスト」について互いの意見交流を通し、単にその是非を語るのではなく、「ポスト」が必要となった社会の問題点に気づかせたり、人の命の重さを再認識し、家族としてどのように子供を考えるべきなのか、「幸せ」に生きることとはどういうことなのかというところまで考えを深めさせたい。

2次 1次での話し合いを振り返るとともに、ゲストティーチャーとして地域在住の生命誕生に携わる助産師さんや本校卒業生で子育て奮闘中の新米ママを招き、直接話を聞いたりと、実際に赤ちゃんを抱かせていただく場を設定する。

②ワークシートの工夫

1次の「赤ちゃんポスト」に関しては、是か非の二者択一とはならない問題である。そこで、ワークシートに数直線をつくり、どの程度設置に賛成かあるいは反対なのか、自分の考えを持ちやすいようにした。

3 指導の実際

過程	学習活動	発問等と予想される反応	・支援 ◎評価(方法)
考 え る	2. 資料を読み、赤ちゃんポスト設置に賛成か反対か自分の立場と理由を書く。	○あなたは赤ちゃんポストの設置に賛成ですか、反対ですか。	・「赤ちゃんポスト」の資料を配り、教師が範読する。 ・自分の考えを書き記すワークシートを準備する。
	3. 黒板の数直線上にネームプレートを置くことで自分の立場を示す。 4. 意見を発表する。	「命は助かるから安心だ」 「子供にも生きる権利がある」 「命を救うには仕方がない」 「簡単に捨てる人が増えるから設置すべきでない」 「命は物じゃない」 「身勝手な親が増える」	・賛成、反対のいずれでも、どの程度賛成なのかを数直線上で確認できるようにする。 ・100%賛成(反対)やほぼ賛成(反対)だが、100%とは言い切れない理由(根拠)を聞き取るよう心がける。

C-1 指導案

4 成果と課題

(1) 成果

① 複数時間（2時間）による設定

1次で扱った「赤ちゃんポスト」は、これが正しいという答があるわけではない。賛成であれ、反対であれ、生命を大切にしなければならないという思いは生徒の発言や授業後の感想等から十分に感じ取れるものであった。そして、2次として助産師さんや新米ママのゲストティーチャーとの交流に十分時間をかけ、赤ちゃんをその手で抱かせてもらう体験を通して、生命尊重の意識の高まりとともに、これまで育ててもらった家族や多くの方々の愛に気づき、感謝の思いを綴った生徒もいた。

② ワークシートの工夫

数直線を用いたことにより、「初めに持った意見」と「他の意見を聞いたり考えが深まったあとでの意見」を比較しやすかったようである。また、ワークシートの自己評価欄は、1時間の授業を通して自分がどれだけ共感できたか、感動できたか、また、自己を振り返ったり、新たな発見の機会となった。

(2) 課題

- ・ゲストティーチャーの活用は大変有効であるが、授業者の思いをしっかりと伝えておかないとならないと感じた。そのためには、十分な打合せをしておく必要がある。
- ・複数時間の設定や、ゲストティーチャーの活用は、思いつきで実施するのではなく、年間計画や中・長期計画の中に意図的に盛り込むことにより、各教科や特別活動、総合的な学習の時間等と絡めた横断的な学習が可能となる。
- ・時事問題を資料として取り上げる際には、資料の提示に十分配慮する必要がある。

D-1 生徒感想

地域のお年寄りとふれあおう

特別活動 第3学年

珠洲市立大谷中学校・教諭

1 事例の概要

本校は、全校生徒27名の小規模校である。3年生は男子4名、女子4名、合計8名の学級である。小規模校の良さもあるが、小規模校であるがゆえに気になるところもある。

本校生徒の良い点として、友だちを思いやる心をもっていること、教師や友だちの賞賛を喜ぶ素直な心をもっていること、男女の仲がよいこと、自己肯定感が高いことなどがあげられる。今後伸ばしたい点としては、①根気よく作業を続ける忍耐力、②自分の係や役割をきちんと果たそうとする責任感、③集団への帰属意識の高まりと学級や学校に対する愛着などがある。

伸ばしたい点の①「忍耐力」は、教師の支援に甘えてしまうのではなく、生徒の自主性と自立性を育む環境を作ることが大切であると考え。②「責任感」は、固定化された人間関係の中で責任の所在をあいまいにするのではなく、個人の役割の大切さを実感することができる取り組みが必要であると考え。③「愛着」は、やらされる学級活動や生徒会活動ではなく、自分たちの学校を作ろうという気持ちをもって主体的に取り組む活動が必要であると考え。

そこで次の2つのことを仮説として、学級活動と生徒会活動に取り組んだ。

- ①学校や学級で一体感を味わうことができる体験活動を主体的に行うことにより、友達によさに気づき学級や学校に対する愛着が深まる。
- ②学校や学級で一体感を味わうことができる体験活動を主体的に行うことにより、忍耐力や責任感を育むことができる。

本事例は、学校近くにある「波の花デイサービスセンター」訪問への実践事例である。

2 実践内容

(1) 活動の目標

- ・ 波の花デイサービスセンターの訪問を自主的に計画し実践することにより、集団で取り組むよさを味わう。 [A学級活動(1)]
- ・ 社会の一員としてボランティアの意義を理解し、よりよい方法で自主的に実践する。 [A学級活動(2)]

(2) 指導上の工夫点(視点)

① 道徳との関連

道徳の時間にマザーテレサの活動について書かれた資料「あふれる愛」を扱って、人類愛について考えた。そして、道徳的価値の自覚化を図りながら、自分たちが地域でできるボランティアとして、「波の花デイサービスセンター」訪問を計画し、学級活動として取り組んだ。

② 相手の立場に立って考えるための工夫

2年時にわく・ワーク体験を「デイサービスセンター」で行った。その時に接したお年寄りの方のことを考えたり、職員の方の苦労を思い浮かべたりしやすいように、体験時の写真を提示し、所長さんのビデオレターを視聴した。

③ 主体的に取り組ませるための工夫

計画・準備・実践のすべてを通して生徒の自主性を大切にした。学級活動時間の後半は、学級会長の司会による学級会とした。生徒が自分たちで話し合っただいサービスセンター訪問を計画するよう、場面を設定した。

また、デイサービスセンター訪問の準備では、生徒が互いに相談しながらも一人一役を担い、責任を持って取り組むことができるように、1グループ2～3人で編成し、3つのグループに分かれて活動するようにした。

B-1 指導計画

B-2 すごろく

B-3 福笑い

3 指導の実際

流れ	学習活動と発問	支援(★)と評価(◆)と指導上の留意点(●)
導入	1. わく・ワーク体験で活動した感想を話す。	●わく・ワークの写真を提示する。
展開1	2. 波の花デイサービスセンターの1日について想起する	●1日の活動が分かりやすいように板書する。
展開2	6. 活動内容を計画する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">どんな活動をしたらよいか具体的に考えましょう。</div> 7. 学級として取り組む内容を決める。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">どんな活動をしたらよいでしょうか。話し合っ て決めましょう。</div>	●ワークシートを配付する。 ◆訪問の計画を立てることができる。 (ワークシート) ★近くの友達と話し合わせる。 ◆訪問の目的を考え、お年寄りが喜ぶ活動を選択している。(発言) ★疑問点を友達に説明させる。 ●話しやすいように座席を口の字型にする。(司会は生徒)

C-1 指導案

4 成果と課題

(1) 成果

- ・ 道徳と関連させることによって、相手の立場に立った言動の大切さを自覚し、デイサービスセンター訪問活動計画を考え、訪問時でも行動に移すことにつながった。福笑いやすごろくの道具作りでは、お年寄りのことを考えて大きく作ったり、持ちやすくしたりする等、主体的な取り組みとなった。その後の学校生活や係活動においても、相手の立場に立って考え行動する姿が見られ、よりよい生活を築こうとする自主的・実践的な態度が育ってきた。
- ・ 小グループに分かれて活動する場や、話し合う機会を用意したことで、友達の良さを再確認し、お互いの良さを引き出しながら取り組むようになった。その後行われた生徒会行事「大谷の海で遊ぼう」では、さらによりよい学校をつくらうという意欲の高まりが見られ、主体的に活動計画を立て、協力し合って準備・運営し、充実感を味わうことができた。
- ・ デイサービスセンター訪問では、責任の所在をあいまいにしていたために、当日予定していたゲームができないグループがあった。この失敗から計画性と責任を持つことの大切さを学び、その後の生徒会行事では役割分担表を作成するなど責任の所在を明らかにし、それぞれがしっかりと役割を果たした。一人一人が責任を持ったことで、学校は自分たちがつくるのだという自覚を持つことにつながった。

(2) 課題

- ・ 学級会の話し合いでは、学級会長の司会により進めさせたが、不慣れであったためまとめるまでに相当な時間を要した。話し合い活動を充実させるためには、話し合いの仕方や方法を学校として系統的に捉え、段階的に指導しておくことが必要である。
- ・ 生徒の実態把握が不十分であり、行動に対する見通しの甘さを感じるがあった。特別活動の目標と年間計画を、生徒の実態にあった内容に改善するとともに、社会の一員としての自覚を高める体験活動を充実させていかなければならない。

D-1 デイサービスセンター訪問の感想

D-2 大谷の海で遊ぼう

事例31 単元「ふるさと七尾に発信しよう」

一人一人の学びの広がりをめざす総合的な学習の時間の実践 ～地域との関連を図った実践を通して～

総合的な学習の時間 第3学年
七尾市立朝日中学校・教諭

1 事例の概要

本校では各学年ともに週2時間の学習を基本としながらも、規定の時間の中で、学習内容によって柔軟に時間を確保しながら実践を行っている。これは生徒の活動がより効果的に行われることに配慮したものである。本時間では「ふるさと学習」を内容としながら、体験活動を重視した問題解決型学習を展開していくことを基本としている。そして「ねらい」と「到達点」・「生徒に身につけさせたい力」を明確にした学習を心がけていくことで、教師－生徒間、生徒－生徒間で学びの方向性が共有できるようにしている。また、学習内容が深化・発展していくように連続した学びとなるように位置付けを工夫している。

これらの活動を通して、身につけた力が生徒の生活の中で能動的に生かされる経験化されたものとなっていくことをめざしている。また、小学校で身につけた力を把握し、それが中学校での学習にも生かされていくことにも配慮している。

A-1 本校の総合的な学習の時間のねらい

A-2 各学年のテーマと活動の概要

A-3 身につけたい力

A-4 評価の方法と評価の観点

A-5 総合的な学習の時間と他教科の関連

2 実践内容 3年生 「ふるさと七尾」に発信しよう～未来の主演として～

(1) 単元の見どころ

- ・「学ぶ姿勢」や「学び方」「学ぶ力」をより高いレベルで生かすことができる。
- ・課題を解決するための方法や技能を場面に応じてよりよく使うことができる。
- ・自ら課題を見つけるとともに、課題解決のためのよりよい方法を考え、見通しをもって進んでそれを解決しようとする。
- ・学習の成果をまとめることを通して、自分の考えを構築し、よりよい発表を行うことができる。
- ・主体的に活動し、自己の生き方に反映させることができる。自己決定力を身につけることができる。
- ・集めた情報を整理し、自分の考えを明確にすることができる。
- ・自分の主張がよりよく伝わるようにまとめ、効果的に発信することができる。
- ・ふるさとへの愛着を深め、ふるさとを誇りに思う心情を高めることができる。

(2) 指導上の工夫点（視点）

① 学びのスキルの定着について

- ・教師・生徒両者が、設定した「身につけたい力」の定着を意識していく。教師は、授業の中で「身につけたい力」を意識しながら指導する。その中で、「身につけたい力」が生徒自身によって自由に駆使できる力として昇華されていくことをめざす。

② 体験活動の充実

- ・学びの質を高めるために、フィールドワークなどの校外での体験活動を充実させていく。

③ 「ねらい」と「到達点」の明確化

- ・生徒、教師、外部講師、訪問先の方々と活動のねらいを共通理解する場を設けていく。

3 指導の実際

学習内容	生徒の学習活動	教師の指導・留意点
①七尾市役所政策推進課の方々とのワークショップ	・「住みやすい七尾」をキーワードに自由に意見を出す。指導助言を受ける。	・外部講師との打ち合わせを十分に行う。ねらいや身につけたい力を共有化しておく。
②発信テーマの決定	・生徒自身から生まれた課題に基づいてテーマを決定する。	・見通しをもって、現実的なテーマが決定できるようにしていく。
③東京フィールドワーク	・班別にフィールドワークを行う。東京から七尾をみる。	・訪問先との打ち合わせを十分に行い、ねらいや身につけたい力を共有化しておく。これまで身につけたスキルの実践の場となるように支援する。
④七尾フィールドワーク	・東京フィールドワークで生まれた課題をもとに、七尾でフィールドワークを行い、検証を行う。	
⑤発信準備	・成果と課題をまとめる。	・考えが明確に構築できるように助言していく。
⑥発信 ・保護者に対して ・地域の方々について ・七尾市役所に対して ・学びの発表会を通して ・ふるさと七尾大事典の発行を通して ・新聞・ラジオを通して	・校内外に発信していく。	・生徒が発信したものが、受信側にどのように受け止められたかを生徒に返していく。生徒の自信となっていくように支援する。

C-1 指導案

C-2 概要

4 成果と課題

(1) 成果

3年間の学びの連続性を持たせ、発展していくようにしたことで、生徒の学びに深まりと広がりがみられた。深まりとしては「知る」→「深める」→「発信する」という段階にあわせて、より高いレベルで学びを追究しようとする姿勢が生徒にみられたことがあげられる。また、広がりとしては、身につけたい力として設定した力を、3年間の中で繰り返し実践していくことで、自らの力として応用し、自由に駆使している生徒が多くみられたことがあげられる。

(2) 課題

資料A-4掲載の方法や観点で評価を行っているが、生徒のよい点や学習に対する意欲や態度の高まりの状況をよりよいかたちで適切に評価するために、生徒の実態に合わせて少しずつ改善を試みている。その中で現在特に重視しているのが生徒自身の「ことば」である。生徒自身の「ことば」から、どのような学びがあったのかを教師が読み取ることが現在の課題である。ワークシートの設問の方法などを含めて、今後更に実践を積み重ねて明らかにしていきたい。